

北米インディアンの生活 (10)

—23部族の伝承と習慣—

エルシー・クルーズ・パーソンズ編著 神徳昭甫訳

VII 太平洋岸の部族

VII-2 クラマス川は紛争続き¹⁾, ユロック牧歌²⁾

(ペクワン町のエルキゲリ家、あるいは髪結い³⁾出身のオレゴン・ジム夫人は語る) ルイザ婆さんと私が、なぜお互いを無視するのか、わけを知りたいのでしょうか？ じゃあ、お話し致しましょう。あの婆さんに話しかけて命を救ってやるなんてことは絶対にしませんよ。あの人と私の間、いや、あの人の家と私の家は仲違いしているからです。

私の知る限り、事の始まりは、あそこに交差して立っているあの大きな古い家—ワウセク・ヘスルカウ家出のある女のドラ息子のことからなんですよ。

もちろん、みんながそう呼ぶのは、他の家より後ろにあるからなんです。川からちょっと離れていますから。この女は、別の数人の男と暮らしてしましてね、最初は隣の家の若い男、この男を捨てて次はスミス川⁴⁾から来た、流れ者と一緒になって。それからこの男と別れてフパの男とくっついたときはみんながこの女を“キモリン”、つまり“不潔”だと言い出しましてね。この男たちのだれ一人、ビター文も出しゃしませんでした、この女の家柄はいいんですがね…。

1) 原題はAll is Trouble Along the Klamath. 本編は、オレゴン州のアッパー・クラマス湖を発しカリフォルニア州を横断して太平洋に注ぐクラマス川下流沿岸のユロック族を対象にしている。

2) A YUROK IDYLL. 「ユロック族は、連帯しておどろくほど複雑な生活様式を示している北西カリフォルニアの六部族のうちの一つである。この高度の文化を持つ他の集団はフパ (Hu-pa), カロク (Karok), タロワ (Talowa), チルラ (Chilula), ウイヨト (Wiyot) である。特にこの地域の部族社会における一要素は富の蓄積に基づく貴族制度であろう。名誉毀損から婦女暴行に至るあらゆる被害は金銭の支払いを要求する。従ってユロックは立腹の技術に長けており、喧嘩好きは一つの宗教、金銭を搾り取ることは一つの芸術である。この金銭問題にかけて「汚い」という性格は生まれつきというより、大部分は部族感情の圧力によって押し付けられ醸成されたものであろう。アルゴンキン語を話し、クラマス川の下流に沿って住み、ほとんど魚を常食とし (多量のドングリも食するが)、彼らの習慣を知れば大概は好人物であることが分かる (ただしそれ以前はこの限りではない) (Appendix 408)。なお1970年の調査ではユロック起源とみなされる人口数は3000~4,500と推定されている (Pilling153)。

3) 原文はErkigér-i or “Hair-ties”。

4) オレゴン州との国境近いシップ・マウンテン辺りに発してカリフォルニア州を横断しクラマス川より北方で太平洋に注ぐ。

色んな場所で暮らしています。子供を二人亡くして、もう一人が長老派教会⁵⁾で育てられたんです。

この息子は長老派の連中に輪をかけて常識のない男でした。あるとき、ケペルに下って来ましたが、ちょうど漁業用の堰⁶⁾をみんなで作っているところでした。仕事が完成する最後の日です。もう少しでダムが出来上がるところだから、みんな機嫌がよくて誰が何を言っても腹を立てたりしないし、何を言っても許されるんです。で、この男、誰もが相手を酷い名前で呼んでいるのを耳にしたわけね。踊っている最中ですよ。踊りのときというのは、他のときとは違いますよ。随分、酷い事を言うもんですよ！例えば、キモレット爺さんに、「よ〜、オールド・ワン・アイ片目の爺さんよ、あんたの踊りが一番だね」と言ってもただおかしいだけでしてね。みんなが実に酷い事を考えているんです。ある男が、パーカー・ポップのおかみさんに、「お婆さんどう、お元気？」と言ったことがありました、もう亡くなった人ですよ。たとえ、冗談だと判っていても、そんなことを言われたら、ゾットするもんですよ。

で、私が話している、この若い男はフレッド・ウィリアムズと呼ばれていて、インディアン名は、セールですが、ケペルの漁業用堰^{フィッシュ・ダム・ダンス}の踊りを見物に、ミッション・スクールから下ってきたんです。めかし込んだりして。見せびらかすように歩き回っていました。麦藁帽子にはリボンをつけてね。歌の合間にみんなが口にしてる事を聞いたんですよ。ありとあらゆる、不埒な言葉を使ってましたからね。で、こいつは「面白いな」と思ったんですね。自分も機会があったらそのうちやってみよう、と思ったらしい。翌日、川端に降りると、チューリィ・クリーク・ジム⁷⁾が網の準備をしている。「もう一方の腕も、斬り落とされてしまえ！ それでも足で魚を捕れるだろう」と言ってしまったんだね。そばで二、三人が、立っていて聞いていました。チューリィ・クリーク・ジムってのは、相当いやらしい奴で、「コヨーテ」と呼ばれているほどですよ。変な顔していました。そのままボ〜と立ち尽くして。なんと言ったらいいか、判らなかつたんですね。

ちょうどそこにいたのが、アンドリューという若い衆で、母親はコブテップの「下流の家」⁸⁾

5) 原文はthe Presbyterians。長老派教会は16世紀の宗教改革運動によって生まれた、カルピニズムに基づくプロテスタントの一派。教会組織に長老制度を採用しているところからこの名称が生まれた。アメリカの長老派教会は植民地時代にスコットランドと北アイルランドからの移民によってもたらされた。プリンストン大学は長老派の設立による大学で、初代学長ウィザースプーンはアメリカ独立宣言に署名した唯一の牧師であり、以来、長老派の人々と政治との関係は浅くない。南北戦争のとき奴隷解放問題をめぐって北長老派教会と南長老派教会に分裂して今日に至っているが、両派合わせて約300万の教会員がいる。多くはないがアメリカにおける文化的・社会的影響力は小なくはない(古屋293)。

6) 原文はFish Dam。

7) 原文はTuley-Creek Jim。Tule (ホタルイ草) の多い川辺に暮らしているのであろう。

8) 原文は“Down-river House”。

と呼ばれる家の出なんです、臆病者で通った奴です。これはちょうど自分のボートを押しているところでした。^{ともすな} 纜を離してしまいましたよ。船はそのまま流れて行って。引き返す勇気がなくてそのまま家まで帰りました。「一大事だ」と家の者に告げたんです。「もう、何処か別の場所に行きたいよ。クラマス川の周辺で厄介な事件が起きるぞ」。

コヨーテ・ジムが金を要求しているという噂が間もなく広まりました。あの男の母親の親父に15ドル出させようということでした。「それ位貰ってもいいはずだ」と言ったんです。「あの坊やに何もする気はない。それだけの価値はないよ。どの男もあの母親に金を払わなかったから。それに彼奴を責めたてる積もりはない。でも、あのおふくろの家は金持ちだし、オレが付けた金額位は払ってもらわなくちゃな。さもなきゃ、オレは怒るよ」。実際にはこの男だって事を荒立てるのは怖かったんですよ、フパの軍隊はコイツも怖がってしましから。ただ大口を叩いただけですよ。それにね、欲しかったのは、あの坊主の爺さんが所有する、キツツキの頭^{ヘッドバンド}の髪飾りなんです。自分の孫が言ったことだから、それくらいは手放してもいいだろうと思っただけだ」。

あの若造はあちこち歩き回っては触れ回ってましたね。「オレは払う必要はない」って。「みんなが、似たようなことを言っているのを聞いたんだ！ その日一日だけだと、そんなこと、どうしてオレにわかる？ それにまあちょっと、オレを見てくれ。オレのこのシャツを。このズボンを」。自分の麦藁帽子も見せびらかすんです。「オレの帽子を見てくれ。白人と変わらんだろう。オレは何だって言いたいことは言えるんだ。自分の言うことを気にする必要はないんだ」。

毎日誰かが川岸にやって来て、この事件のことを話してくれました。大喧嘩が始まっていたんです。私は当時娘と一緒にドングリ拾いでメタの上流に泊まっていたんですよ。その年はドングリはどことも酷くて、小さい形も歪んでしかも虫に食われてね。その虫でさえが、その年は小さくて縮こまっていた。メタの上流のその場所だけがドングリがよく成りました。沢山の人が泊まりがけでやって来ました。お金を払った人もいましたが、私は伯母がメタのある家、ウーグィ、つまり^{インザ・ミドル・ハウス}「真ん中の家」と呼ばれている一家に嫁いでいたので、払うことはありませんでしたがね。我々ドングリ拾いが寝泊まりしているところまで噂話をしに、川からよく人がやってきましたよ。あの若いしの母親がスミス川の人たちに払わせようとしているって言ってました。「あそこの連中の一人が、父親なんだ」と爺さんも言ったそうです。「孫が言ったことの代償はそいつが払うべきだよ」。この一件は手間取りました。三週間後も、爺さん、まるで払う気がない、という話でした。

この爺さんの家の誰かが、その秋亡くなりました。お葬式の準備が始まりました。ワウセクのヘスルカウ家のお墓は戸口のすぐ外にあるんです。家人はケメスル、これは「死体置き場」、あんた方白人の旦那方は、^{セメタリー}墓地と言っているね、に行きました。穴を掘って用意はできました。

死者の家族は「^{クライミング・ソングズ}葬送歌」を歌っています。

チューリイ・クリーク・ジムの^{ブラザー・イン・ロー}義理の兄だか弟だか、そのとき、カヌーで川を下って来ました。ワウセクに着いた途端、「葬送歌」が聞こえました。「誰かが死んだんだ」。みんなでこの男に言ったそうです。「停まった方がいい。通り過ぎちゃダメだ。葬式が終わるまで陸に上がった方がいいよ」。でも、この男は停まりたくない。「あそこの家はワシの妻の兄弟に借りがある」と言うんです。「あそこの誰かがジムに何か言った。でも金は払わん！ どうしてオレが陸に上がる必要がある？」そこでみんなは、船着き場まで行きました。そこから船を廻して、下流へと漕ぎ始めたところ、船着き場にいた若い男が、カヌーを掴んで「ここで上陸しろ」と言います。「伯母の家で葬式をやっているんだ。船で通り過ぎるのはいけないじゃないか」。船の中の人たちも怒りだしました。櫂で川底を押して、船の向きを変えました。コヨーテ・ジムの義理の兄弟は立ち上がる。相当腹を立てていました。水を掛けられシャツも濡れていました。櫂を振り回したり、怒鳴ったり、興奮して来たんです。

土手にいた連中の中に、河口のビリー・ブルックスがいました。「おい、おまえ、『金を払わず女と暮らした奴』と、ビリー・ブルックスに言ったそうです。「オレの船から手を離すようにこいつらに言うんだ！」。ビリーは驚きましたね。自分はカヌーに触れていたわけじゃないし。とにかく、そんなふうには呼ばれるなど、思ってもいなかったの。自分に対して「レース・ソン」という言葉が使われたんだ、と理解は出来ました。これは「路傍の家で女と同^{ハーフ・マリイド}棲、あるいは未入籍のまま暮らす」という意味なんです。ブルックスには妻を貰うような金はなかったの、自分の家に連れてくる代わりに、女とそうやって住んでいたんです。それが、ここでは「同棲」という意味です。みんながビリーのことをそんなふうに呼んでいるのですよ、陰ではね「路傍の家で女と同棲している男」⁹⁾というのがこの男の名前です。

ビリーは茫然自失の状態から回復すると、カンカンに怒りましたね。カヌーの中のその男を指差しました。およそ人間が口にする最悪の言葉で罵ったんです。それは、恐ろしい言葉です。その男を指差して、完全にキレてしましましてね。もう、どうなったって構やしない、と思っただけです。「おまえらの死んだ家族」¹⁰⁾というのがカヌーにいるコヨーテ・ジムの義理の兄弟に投げつけた言葉です。彼はカヌーを指差してましたから。そのとき「おまえらの死んだ家族」と、こう言ったんです、乗っている全員に向かって。

コヨーテ・ジムの義理の兄弟は船の中に座り込んでしまいました。その後は、誰も船を停めようとしたものはいません。カヌーは川を下って行きました。ビリー・ブルックスは家に入って待ちました。しばらくして家人が亡くなった人を埋葬して葬式が終わりました。「金を払わ

9) 原文は、“half-married-into-the-house-by-the-trail”。

10) 原文は、“Your deceased relatives”。

なくちゃなるまい」と彼は言ったそうです。「あんまり腹が立ったもんだから、オレはコヨーテ・ジムの義理の兄弟に酷いことを言っちまった。みんな、アンタらのお陰だ。もし、アンタたちがコヨーテ・ジムにちゃんと借りを返しておれば、奴の兄弟は、葬式の最中にこの家の側を通り過ぎたりしなかったろうし、奴もオレにあんなことは言わなかったろう。従ってオレも何もあんなことは言わんでもすんだ。その上にウォウケル・デイヴが中にいたから、オレが言ったことはアイツに対しても当てはまることになる。オレは自分の言った事が恥ずかしいよ。あの二人を相手に喧嘩しなくちゃならん。船の中には他にも人はいたが、あとはみな、貧乏人だから、どうってことない。だけど、デイヴは金持ちだ。ところで、この騒動はみなアンタ方のことで起こったことだ。だからアンタたちはオレに2ドル半払ってくれ。

ワウセクの老人は困ってしまいましたよ。「最初におれのところのネズミが、どんな場合でも言っちゃならんことを言っている」とこぼしています。(ここでは庶子の子供のことをネズミというんです。ネズミは物を食べ、いつきますけど、誰も金は払ってくれませんのでね)。「さて、オレのところのネズミが言ったことが元で、こんな余分な騒動まで引き起こしてしまった」。

誰もがこの喧嘩の話で夢中でした。この頃はもう、老人の災難などはそっちのけで、ビリー・ブルックスが船の中のコヨーテの義理の兄弟とウォウケル・デイヴに向かっていったことに話が移っていました。結局カヌーの舵を取ってビリー・ブルックスを「レース・ソン」と呼んだ奴は、喧嘩の当事者から外れられてしまいましたよ。死んだ家族のことを口にされたけど、一方で父親は、母親に25ドルしか払っていませんので、誰もこの男のことは気にかけなくなったんです。相当かけずり回ったんですが、誰にも相手にされませんから、もう黙っていた方が得策だと思ったようです。おそらく侮辱されたことも忘れられてしまったんでしょうね。

しかしウォウケルは有力者ですからね。彼の家族はクラマス川周辺のいくつかの名家と姻戚関係にあります。誰もが、このウォウケルとブルックスがどうするか、興味津々でいました。ビリー・ブルックス自体はいやらしい男です。よくない評判がいろいろとありましてね。白人にも何か言いがかりをつけて金をむしり取ったことがありました。この白人はブルックス家の女を誘い出して一緒に暮らそうとしたんです。ブルックスはこの男のところへ立ち寄って金を取りました。みんな奴を怖がっていましたよ。「ブルックスは金を払うような奴じゃない。実に卑怯な男だ。あいつに恐ろしいものはない。とことん戦うだろうな」という人たちもいれば、「ふつうの人間が相手ならそれでもいいだろう。でもウォウケル・デイヴはふつうじゃないぜ。奴の親父はカミさんに大金を出している。川辺じゃ一番豪華な披露宴だった。デイヴは誰にも負けやしないさ」と、まあこんなふうに言い合ったものです。ああ言えば、こう言うで、ほとんど喧嘩になりそうな状態でした。

突如としてビリー・ブルックスが自分の言った事で慰謝料を払うということで、川を下ってくる、という噂が広まりました。ある者がやって来て、ビリーが払うつもりでいる、と言うん

です。「25ドル払うといったよ」とこの男。翌日になると、デイヴが受け取る気がない、と聞きました。40ドル欲しいんだと。相当やりとりがあって、ようやくケリが着いたのは二月になってからです。ビリーは現金で20ドル、軍隊式マスカット銃の中身を改造したショットガン、それからあんまり上等じゃないけど、一続きの貝殻貨幣を払わされました。貝殻は小さいけど一胸から指先まで届く一長いものでした。

次に起きたことが元で私とルイザ婆さんの仲がこじれてきたのです。それはビリーが現金で20ドルを払わなかったからです。奴には20ドルを手放すことができないわけがありました。その頃インディアンの何人かが集団で馬を盗む事件がありました。うちの部族の者じゃありません。ボールド・ヒルズのチルラ族¹¹⁾か、あるいはどこかそこら辺りの連中ですよ。おそろしく貧しくて嫁に支払うこともできません。何にも買う事ができないので、自分らの部族同士で結婚するんです¹²⁾。春先にはとても凶暴になりましてね。色んなことをしでかすのですが、このたびは白人から馬を何頭か盗んだんです。この白人はフパのインディアン局¹³⁾に訴え出ました。で、フパから軍隊が派遣され、これらのインディアン征討に乗り出したわけです。ところでビリー・ブルックスは狩りの名人です。狩猟と罟仕掛けでどこにでも行きます。軍隊には案内が必要で、そこでこのとき、25ドル出すから合衆国政府の斥候^{スカウト}になってこの部族の征伐に力を貸してくれないかという依頼がビリーに来たんです。

軍隊はレッドウッド・クリークに行き、ビリーも同行しました。軍曹が一人と六人の兵士だったそうです。そのうちの二人はレッドウッド・クリーク、これはオトレップ語¹⁴⁾から来ているのですが、その川口から上流のおよそ6マイルのところにある、そのインディアンの町に行きました。この町はチルラ族のもですよ。この二人の兵士は馬ドロボーの搜索です。そこでしばらく、また騒動が起きました。兵隊とインディアンの間で喧嘩になったのです。

原因は女のことで、兵隊の一人が女を気に入って関係を迫ったんですが、当の女が承知しません。どうしてもイヤだというんです。どうなったか正確には知りませんが、兵士はあきらめず何とかしようとしても女も頑張って、ついに女の家のものが、娘がイヤだと言っているから、どうしようもない、とその兵士に言いました。それで喧嘩になりました。兵士が拳銃^{リヴォルヴァー}を抜いて取っ組みあいになったんです。その銃でだれかが頭を殴られて。照準の先って鋭利ですから。この兵隊はヤスリを使ってなんとか照準は元通りに直したんだそうですが

11) フパ、それとチルラ、ウルクットはフパの方言として、アサバスカ語族に属するとされているが、クラマス・モドック語はこの近辺では孤立語でルツァミ語族でペヌーティ大語族に入り、オレゴン州南中部に住む2000人のうち150人が話者である（アシャー・モーズレイ Map 8; 19）。

12) 先住民の間では、同族内での結婚は近親相姦として禁忌されている（クラックホーン25）。

13) 原文は、the agent.

14) Otlep. 詳細は不明。

ね。でも殴られた方は、顎の骨から目に達するまで顔を抉られる大怪我でした。

あのときは大騒動になったという話です。みんなが怒鳴り出すしね。あの女もひどく怒りっぽい奴で、石で兵隊の頭をカチ割ったというんですから。先に兵士に頭を割られた例の男は、銃に手を伸ばしました。目がよく見えなくてね。雷管がきちんと作動しなかったんです。白人兵士を打とうとしましたが、弾丸は出てきません。雷管が撃鉄から外れなかったんです。兵士はインディアンが自分を狙っているのを見て、発砲しました。でも目に血が入ってしまって、女に頭をカチ割られたもんですからね。で、狙いが外れてルイザ婆さんの甥っ子のジム・ウィリアムズに命中しました。弾丸は太ももを貫通したそうです。ジム・ウィリアムズがまともに歩けるようになるまで丸二年かかりましたよ。

さて、ルイザと私の喧嘩のことです。甥っ子が怪我をしたのでルイザはビリー・ブルックスを非難しました。このとき軍隊と行動を共にしてその片棒を担いでいたのですからね。でもビリーはこれに対して決して金を出そうとはしません。一度は払うという噂がありましたが、嘘でした。

さて現在ビリーは私の姻戚に当たります。妹が私の兄弟の長男と結婚したからです。あの婆さんが私を嫌うのは、甥を撃った兵隊を案内していたのがビリーだったからなんです。

一度は汚い手を使ったことがありましたよ。私の甥がこの川で刺し網ギル・ネットを使って漁をしていました。監視員が文句を言って逮捕しました、網の端を土手にしっかりと括り付けていたからです。あの婆が、ルイザのことですが、ユリイカに行って裁判官に網の端を岸に括り付けていたと密告したからなんです。それでいくらか貰ったそうですね。2ドルだったという人がいますが、で甥は60日間拘留されていました。あの婆には何も言ってませんが、いつでも気を付けてはいます。あいつに話しかける人は、私とは関係ない人です。

あるとき、^{しも}下から白人の男が川を上ってきて籠のことを聞きました。物の名前を全部知りたがるんです。あんなのは一種の気違いですよ。「ヘーポオ」、つまり「籠目当てバスケット・デザイン」と呼ばれていましたがね。いつも「それはどういう意味だ?」「その名前はなんて言うんだ?」籠に関するあらゆる事が知りたいわけです。ルイザが持っている籠のことで一日半も聞いていました。それから垣根を通り抜けて私の家に来ました。一言も答えないものだから帰って行きましたよ。私の友だちはあの婆さんに話はしないし、向こうも同じです。もう永久にそうでしょう。

結局すべてはセールという、あの若造のことから始まるんです。もし、アレが片腕のチャーリー・クリーク・ジムに何も言わなきゃ、ジムの義理の兄弟も、死人が出た家のそばを船で素通りしなかつたらうし、舟のことで喧嘩になつたりしなかつたはずだから、ビリー・ブルックスもだれにも暴言を吐いたりせず、したがってピター一文も支払う必要もなく、政府の斥候に雇われることもなく、レッドウッド・クリークでインディアンが撃たれることもなかつたわけだから、ルイザ婆さんが、私の甥を告発することもなかつたんです。賠償金を払わせるのは構

わないですよ。これは喧嘩が起これば、いつでもそうすることですから。しかし人の甥っ子を牢屋に入れるのはよくないですよ。

私はあの婆さんと二度と話をするつもりはありませんし、私の家のものもみなそうです。

T.T. ウォーターマン¹⁵⁾

VII-3 サヤチャップス¹⁶⁾、ヌートカ族¹⁷⁾の商人

トムは盲目の老人で、彼が毎日、居留地付近の道路を通るとき、またソマス川の岸辺に集まっている薫製小屋まで続く丘の斜面を上り下りするときに、その杖の立てるカチカチ、パシャパシャという音が、あるいは耳元に届くかも知れない。彼はバンクーヴァー島の西岸で一番深く奥まで入り込むアルバニー^{カナル}運河の先から2,3マイル上ったところに今や位置するヌートカ族の一つ、ツツイシャッアス族の名誉部族員なのである。このツツイシャッアス族はこの川、つまりこの「運河」の全流域で、または下って南のパークレイ・サウンド—これはこのバンクーヴァー島の荒々しい海岸線上で湾曲しているビール岬から北に上って、最初の大きな湾なのだが—に点在する何百という島々の間で、釣り糸を垂れたり、銚を振るったりしているのだ。

トムは若い頃は今や廃村となってしまったヒクウイス—ここでは数列に並んだ家並みからパークレイ・サウンドの海峡を見渡せた—で過ごして、数十年間はずつとは夏季の漁場であり、第一回目の漁の際に他所の部族から奪い取ったその、川沿いの居留地とその近辺で、平穏な生活を送ったものである。手頃な近場には、白人の町、アルバニーとポート・アルバニーがゆっくりと発展してきて、この部族が祭りのときに必要なビスケットやオレンジなどは手に入るか

15) T.T. Waterman. アメリカの人類学者で原著の共同執筆者の一人。生没年など詳細は不明。なおユロックに関する以下の二つの論文がある。Yurok Geography (University of California Publications in American Archaeology and Ethnology vol. XVI.) ; Notes on Yurok Culture (Museum of the American Indian, Heye Foundation, [in press]).

16) Sayacha'pis. ヌートカ語の音韻の特徴の一つとして破裂音と破擦音の系列に、声門の閉鎖位置を高めて気流を作る声門化音（放出音）がある（大島7）。Sayacha'pisのアポストロフィーで示される部分の発音もこの声門化音に当たると考えられるが、本稿ではこれを便宜的に「ツ」で表記する。以下Ts'isha'as, Nash'as'as等も同様。

17) ヌートカ族は「北西沿岸インディアンの一部族。カナダのバンクーバー島から米国ワシントン州の太平洋岸にかけて住み、言語学的にはウォカシ語族に属し、同じ語族中のクワキウトとは最も近い関係にある。生業としては捕鯨が中心で、太平洋岸に住むインディアンの中でかれらだけであるためもあって、古くから知られるようになった。白人との接触は早く、1592年にスペイン人がかれらを訪れ、その後、17世紀なかば、18世紀後半にもスペイン人が来ており、さらにはキャプテン・クックが1778年春にこの地域に滞在した。初期のかれらに関する記述はクックの報告によるところが多い。1780年の人口は約6000であったが、1906年には約2000人。現在もほぼこのくらいと推定されている」（祖父江566）とあるが、1984年の調査で人口は4720人（Arima & Dewhirst 408）であった。

も知れないし、定期的にインディアン局に不服を申し立てることも出来よう。トムは今でこそ歳とって貧困に苦しんでいるが、以前の裕福な暮らしぶりは、同族の人々の記憶に残るところだ。彼が何度も主催した祭りや、踊り大会、展覧会などはすべて好評だったし、彼の息子や娘たち、孫などにも余徳が及んでツツイシャッパス族の中であってこの家族を著名な位置に押し上げたばかりか、さらにその名を遠隔地にいる他のヌートカ族や、違った言葉を話すバンクーヴァー島の東岸の部族にまで轟かせていた。この老人は今、古い儀礼の歌を口ずさむたびに、それに合わせて杖を叩きながら、こうして炉端で大部分の時間を過ごし決して飽きることがない。

トムの現在の名前はサヤチャップス、^{スタンド・アップ・ハイ・オヴァー・アバフ}誰よりも高く立つ者と言う。それは八代前のある老人の名前で、今では絶滅したヒサウイスタス族に由来しているのだが、トムの父親の祖母、実はこの人の母方がヒサウイスタス族だったからなのである。部族は絶滅しても、人の名前は継承という、編み目の細やかな^{ネットワーク}網状組織によって、歌や伝説や、独自の祭儀のように近隣の部族の中に残存していくものなのだ。誰よりも高く立つ者という名前も、実際ヌートカ族全部の、また西海岸のあらゆる名前と同様だが、その伝説的な背景、歴史的証明書を有しているのだ。この名を持った最初のヌートカ族の^{チーフ}族長は、夢の中でこれを得たものである。彼は富の獲得のために、「ちから」^{パワー}を目指して森の中で宗教的な修行をしていて、長い間、眠っていなかった。とうとう、深い眠りに落ちて次のような内容の夢を見た。^{スカイ・チーフ}大空の首長が現れてこう言った。「なぜ、眠っている、誰よりも高く立つ者よ。おまえは本当は富を得たいのではないのか？ 私はおまえを富者にして、誰よりも高く立つ者という名前を与えようとしたのに」。こうした^{アイロニカル}諧謔的な調子はこれら起源を差し示す伝説に特徴的なものである。こうしてこの名、すなわち、超自然的能力は、あるときは男子の直系に、またあるときは未亡人から本源の場とは遠く離れた、ある村の住民である義理の息子へと、数世代に亘って継承されていったのだ。

これはすべての権利の移譲について現実的にも理論的にも通常のあり方であり、ある権利の所有者が、歴史的、あるいは伝説的な原郷から100マイルかそれ以上も離れたところの村人であっても、当該部族の知識に通暁し、原初の伝説やその出所、由来を所有している話し手の元へ直接出向くか、あるいは照会によってその権利を最初に享受したと信じられている、この人物と自分とを結びつける系統樹、つまり歴史的関連性を自ら証明できなければ、それを使用する権利を完全に持ったことにはならないのである。

トムはサヤチャップスの名前を常に持っていたわけではないし、また生涯それを保つ必要もなかった。彼はそれを30年以上も前に、今は故人となった長女が思春期に達したときを祝って行った盛大なポトラッチ¹⁸⁾の際に取得したのだった。そのときまでは、今、長男のダグラス

18) Potlatch. 北米インディアンの間で自分の財力を誇示するために行われる贈答の儀式。

が世襲しているナウェックという青年期の名前であった。それは、ナシュアスアス一門¹⁹⁾、つまりツイシャアス族の下位集団に属する名前であり、トムの母方の祖父が最初に夢の中で得たものである。かくしてそれは比較的起源としては新しい名前であるし、トムが現在持っている名に付随する高貴な連想を呼び起こす香気を持ってはいない。その正確な意味は不明だが、最初の所有者が夢の中で見た鯨の精霊^{ア・スピリット・ホエール}が発した「来れ！」という命令形だと言われている。トムはそれをまだ未婚の時代に、同族内で行ったポトラッチの際に取得した。それはフレーザー川での砂金の発見が、ブリティッシュ・コロンビアにかなりの数の白人の流入をもたらした時期とまさに軌を一にしていた。これ以前は彼はクンニユ、すなわちニティナト族の若者の名で「^{ウエイク・アップ}眼を覚ませ！」という意味を持つ、やはり鯨の精霊の夢から得たものである。ニティナト・インディアンは島の南西海岸を占めるヌートカ族の一集団であり、その名前やその他のニティナトに関するトムの所有権は、ニティナト・インディアンであった父方の祖父から彼に伝わったものである。この名前は捕鯨の能力を得るための修行をしていたときに夢の中でそれを授かった、彼の曾祖父のまたその曾祖父の代に始まった。トムが十歳くらいのときに、このニティナトの祖父がツイシャアス・インディアンで開いた襲名パーティの折にトムのものになった。それは彼のそれまでのハウイフルクムクトリ、^{ハヴィング・チーフス・ビハインド}「数多の長を置き去りにする者」という名前に代わるものであった。後者は、正真正銘、ツイシャアス起源を持っており、やはり鯨の精霊から夢の中でその名を得た、彼の父方の祖母の祖父からトムに受け継がれたものである。この祖先は捕鯨業に大いに成功しすこぶる分限者となって「並みいる族長を置き去りにした」人物であった。トムがこれを父方の祖父から貰ったのは普通の宴会^{パーティ}であった。

記憶している限りだが、トムの最初の名前はトリニツアワ、^{ゲッティング・ホエール・スキン}「鯨皮を得る者」である。偉大な族長、^{ホーヘニクウオップ}が、手に入れた鯨の体を浜に曳き上げるとき、少年たちが鯨皮のおこぼれに与ろうと波打ち際にやってきたもので、彼は「鯨皮を得る者」という名前を息子に付けようと考えた。その使用権は彼の長男が受け継ぎ、その後はまた族長の妹にも伝えられたので、この人は持参金代わりにトムの父方の祖父にそれをもたらしたのである。トムはその名前を父方の祖父が、数年前に他界した息子トムの父親である一を悼んで開いた法事の際に貰った。それ以前のトムの名前は子供っぽい綽名みたいなもので、言い換えれば、両親が所有する先祖伝来の名前の^{ストック}備蓄から賦与されたものではなく、ごく気まぐれにその場で思いついた名前なのであった。このような愛称には儀礼的な価値はなく、権利もない、それゆえまた、遺産とか財産として相続されたり、譲渡されることもない。トムは自分の愛称が何であったかささえも忘れてしまっていた。

19) 原文はthe Nash'as'ath sept.

まず初めに、様々な機会にトムが自ら何と名乗るか、読者におおよその見当を得てもらいたくてヌートカ族の生活環境を示す二つの大きな社会的要因を紹介しよう。

これらの最初のものが特権^{プリヴィリッジ}で、実質的、儀礼的な価値を有するものに対する権利である。このような特権はインディアンには「トパティ」と呼ばれていて、こうしたトパティに次から次に躓いてやっと彼らの生活なり、信仰なりが深く理解できるようになるのだ。二番目は、家系的、血縁的な関係からなる網状組織^{ネットワーク}で、これが部族員として一回限りのものだけでなく、いかなる重要な活動にも共同参加できる主張に関連するゆえに、北西沿岸インディアンの地位を決定するものである。系図的な過去の糸は北西沿岸の人々に強く絡みついているのでその人自身が、様々な土地に属し、また自らを様々な血縁関係に巻き込んでいる、社会的な諸々の特性の伝統的な構成要素なのである。

したがって、憶えている限り常に彼は特権とか、階級とか、あれこれの権利を欲しがっては互いが主張しあう雰囲気骨の髄から浸かっていた。これ以上先は思い出せないほどの昔から次のような言葉を聞いていた。「トウトウチ老人にはポトラッチで行う、あれこれの特殊な雷神鳥踊り^{サンダーバード・ダンス}にはまったく権利はありはしない。あの人の主張は明瞭でない。あれよりもっと些細な理由で人が殺されたオレの爺さんの時代なら、あの踊りの一等権利を持つアハウサスの族長が命令に従うようにキツく迫っただろうに」。しかしまた、彼はトウトウチが誰も真偽のほどは証明できない系図か何かを持ち出して、自分の正当性を激しく主張しているということも耳にしている。さらに、彼は物心ついてから、自分は単にツイシャアス族のみでなく一住居からまた、直接の血統からしてまず第一にそうなのだが一他のヌートカ族の伝統とか、社会的な雰囲気の中でも暮らしてきた、と考える習慣を持っていた。長い海岸線のあちらこちらに点在する村々に居住する遠い親族を何処に探したらよいか、彼は常に熟知していた。

トムは生まれて二、三年は色んな布に包まれ、またヒマラヤ杉の樹皮を叩いて柔らかくした編み紐をきつく巻き付けた籠細工一揺かごの中で過ごした。母親の両肩の後ろに紐を廻して見通しのよい高さに吊るした揺かごの中から海を見下ろした微かな記憶がある。彼はまた、母親と四、五人の女性が、固い、先の尖った穴堀棒^{ディッキング・スティック}を持って食用の四つ葉の根を堀りに離れた間、柳の木に縦に立てかけた籠の中に一人に放って置かれて激しく泣いたこと憶えている。

この揺籃期にトムの頭、というよりむしろ額にはヒマラヤ杉の皮板を宛てがわれ、徐々に平らになっていった。ふくらはぎを太くするために上脚と下脚に布を巻かれた。インディアンにとって広い額とか、細い脚は好ましくないと信じられているし、また太い眉も許されないうえにこれは必要とあらば、少々引き抜いて細いものにした。トムは幼い頃、母親に十分矯正されたおかげで後年、ほとんど自分の外見には気を使わなくて済んだのである。他の部族員と同様に彼も顔に生えている僅かな髭をわざわざ引き抜くようなことはしない。トムが知っているインディアンの中にはほとんどが胸にであるが、狩りの体験とか、紋章、

ア・クォーター・ムーン ^{サンダー・バード}
 四分の一月、あるいはアシカとか雷神鳥などの刺青を彫っているものもあるが、彼はことさらそんなことはしない。幼児期に頭を平にされた以外、トムは決して自分の体のどの部分であれ、傷つけるような真似はしたことはないが、ただし、鮮やかな虹のようなアワビを動物の腱糸に通したペンダントをつけるために耳や鼻の隔壁に穴を空けたりするのも肉体の毀傷と考えなければ、の話である。彼や他のインディアンが、かなり以前に捨てたこうしたペンダントは ^{インシグニア} 純粋に装飾的な目的で着用したもので、宗教的な記章ではない。

カミソリや毛抜きで顔の表面の髭に当たったことがないと言っても、トムが自分の体の手入れを怠っているというわけではない。あかぎれを防ぐためにしばしば獣脂や赤い塗料を使って体を擦ったりするし、若い頃は夜明けに川や海で冷水浴をして体を鍛えたものだ。この後、毒ニンジンの枝で皮膚が赤くヒリヒリするまで激しく擦って体に刺激を与えたのである。彼は二、三日も続けて水浴や乾布摩擦を欠かすことはできなかった、もしそんなことをして、同輩の蔑みや嘲笑を招くとすれば、である。将来アザラシやアシカ狩りを目指すほどの青年が「おんな」と呼ばれて我慢できようか？ 長い人生の間にトムは祭りのときであれ、森の中のどこかの、とある遮断された場所で超自然的な力を個人的に探求するときせよ、色んな方法で自分の顔に彩色を施した。これらの顔面装飾は—ヌートカ族では何百通りのものが使用されている—幾何学模様であり、超自然的な存在もしくは動物を描いた象徴的なものであったりする。これらの多くは、歌や踊りに関連するもののように貴重な特権と見なされているのだ。

トムが民族衣装—せいぜいそれらしきもの—を着（あるいはその姿を見られ）たのも随分前のことになるが、しかし彼は少年の頃、また壮年期に達してからであれ、部族の人々が着た毛布やヒマラヤ杉の樹皮から作った衣装のことははっきりと憶えている。沿岸特有の大雨のため、また浜辺を伝ってカヌーへ出入りする際には否応もなく絶えず飛沫を見舞われることから、ぴっちりと身体にフィットする衣服とか、足や脚を被う布などは煩わしくまた不快でもあった。ヌートカ・インディアンは決してピッタリと身体にへばりつくシャツや、脚絆、モカシンは身につけなかった。彼らは裸足であり、すね当て不用の部族なのだ。 ^{ブリーチクラウト} ふんどし以上のものを身につける余裕のある男子は、獣皮—熊か、それより遥かに貴重なラッコ²⁰⁾の—にせよ、「黄色ヒマラヤ杉」の内側の皮を撚り合わせるか、地元産の犬の長くて羊毛のような毛で織った毛布にせよ、身体の周りに緩やかに纏った ^{ブランケット・ローブ} 毛布の長い服を着た。婦人はヒマラヤ杉の樹皮製の「ペティコート」を着た、といっても、これはヒマラヤ杉の長い房で縁取りされた ^{ガードル} 緩やかな腰帯に過ぎないが。雨天の際は彼女たちもヒマラヤ杉の皮を撚り合わせるか、根毛の繊維を織って作った、先が丸く、円錐型の帽子を冠る。雨でじめじめしてうっとうしい天気—冬期によくあることだが—男女ともヒマラヤ杉の樹皮、もしくは、 ^{レインクイブス} イグサを編んだ合羽を被る。子供たち

20) 原文はsea otter.

はまったくの裸で雨の中を走り回った。

幼少の頃、トムが食べていた食物は材料の点で現在のものと違ってはいない。そのころも現在でも主に魚—焼いたり、蒸し焼きにしたり、串刺しにしたり、薫製にしたものである。幼い頃に彼が出入りした場所—家の中や浜辺であれ—はどこであってもありがたい魚の匂いに浸されていた。生まれたときから（彼の最初の記憶は）、彼はある漁労民族の生活の一面と毎日、顔を付き合っていたのである。それが、刺が二つ付いたヤスで友だちとサケマスを捕らえることであれ、大人の男たちがヤスで突いたり、流し釣りや、網打ちによってマスを獲ることであれ。あるいは、また海中での熊手使用のニシン漁、また今のインディアンがガラクタ入れの中に放つたらかしている、特別優雅に曲げたオヒョウ針でのオヒョウ漁、グイと動く擬餌^{デコイ}と、長さが違う二つの尖った先—^{オールド}「年寄り」、^{ヤング}「若い」—を持つヤスを使つてのタラ漁。あるいは、薫製小屋で乾かすために何列にも鮭を吊るしたこと、そのおかげで最後の年の秋、最後の鮭が上って来なくなつてのちも長く、このとりわけ大事な魚を今でも食料の供給源として彼が分け前に預かることができるかも知れないのだが。あるいは、料理の最初の準備として女たちが鮭を切り裂く仕事、あるいはまた、魚を扱い、魚を食べる漁民に似つかわしい、何百という、その他の光景の一つ一つ。

魚の次に重要なのは多種多様な食用の貝類であり海に棲む軟体動物—イガイ、ハマグリ、ウニ、ナマコ、そして章魚である。章魚—我々は「^{デヴィル・フィッシュ}悪魔の魚」と言う—の肉は、魚の中では主要なものではないものの、非常な珍味と看做されており、宴会が開かれれば今日の宴会での^{クラブ・アップル}カニ林檎だとかオレンジのような存在で特別な御馳走であった。これらのねっとりした食物よりはるかに重要なのは、おそらく鮭その他の魚に次いでであろうが、海に棲息する哺乳動物であつたらう—すなわち、ザトウクジラ、カリフォルニア鯨、ラッコ、トド、それにとりわけ大事なのがアザラシだった。

トムはこれまでタププリとアザラシを銜でしとめてきたが、以前の世代に属する他のヌートカ族の男もそうであるように、ベーリング海に進出する白人商会のために商業目的のアザラシ漁を相当行つてきた。今は完全に絶滅したラッコは数頭捕獲したことはあるが、トドや鯨はまだない。これらの動物を狩る世襲的権利とか、それがなければその探索は必ず失敗に帰することをヌートカ族のものなら誰でも知っている、呪術的な知識をもまた所有していると公言しているのだが。

茹でた鯨肉、アザラシなどは非常に珍重されたし、銜で仕留めた鯨を浜辺まで曳いて行くこととか、鯨の屍体を岸まで流していくことほど部族暮らしの単調さを破る上での楽しみは他になかった。どちらの場合も、皮剥ぎナイフが準備され、死体が切り捌かれ、それから村で祝宴が開かれた。トムは今でも憶えているが、まだ自分が十歳かそこらの子どものころに一度、岸

辺から400メートル²¹⁾付近で鯨の死体が漂っているのを目撃して如何に興奮して知らせたか、また如何にこの捕鯨村の全員がカヌーに飛び込んだか、如何に苦心惨憺してイラクサの根の繊維をヒマラヤ杉のロープに巻き付けて作った頑丈なしめ縄を廻して浮かべたまま、その死体を彼らが砂浜にまで運んだか、をよく憶えている。この鯨は「測量師」^{メジャー}の指示のもとに慣習的に定められた分量に注意を払って切り分けられ、それから世襲上の権利に従ってそれを受け取る権利を持つものに配分された。トム自身も発見者の御褒美として臍の周囲の肉を頂戴したのだった。その当時としては破格な量の鯨油が精製されたし、その油が上に振り撒かれたとき、祝宴の炎はいつもより高く躍り上がって伝説の祖先たちのものに似せて彫り込んだ家柱が、その鮮やかな閃きの中でくっきりと照らし出されたのである。

トムは幼い頃から陸上の哺乳動物の肉はほとんど食べたことがない。実際、たいていの太平洋沿岸部族はそうなのだが、彼も鹿の肉に対する偏見を持っていて中年の頃にこの島の内部の鹿狩りの部族民数人と接触するようになって初めて、その肉を珍重するようになったのだが、今日に到るまで鹿肉は彼にとっては鯨肉一切れの持つ、あの誘惑するような旨味をもっていないのである。魚と肉は主食であったが、唯一の食物というわけではない。婦人がクロバーとか羊歯のような様々な食用の根を掘るとそれら（の味）は歓迎すべき変化をするし、またブラックベリーやサーモンベリー²²⁾、ムクロジ²³⁾など多様な木の実が冬期の消費のためにしばしば乾燥され圧搾されて、幾分単調な食事に甘みを添えるのである。トムが決して楽しんだことのない味—それは塩味である。年配のヌートカ・インディアンはすべて、食べ物の中の塩分を嫌う。

トムは成長の過程でこの部族の主な手工芸品に次第に眼を開かれてきた。柔らかい赤ヒマラヤ杉と固いイチイやシモツケを問わず、木工細工にかなり熟達して、様々な木工細工に伴う訓練にも詳しくなった—楔や石槌にも、板割り^{ちょうな}手斧^{スムージンク}を使っての削り、穴空け、彫刻刀^{ドリリング}の使い方、^{スティーミング}湯^{のし}、^{ノッチング}挽き目²⁴⁾、^{ベンディング}刻み目による屈曲等々。彼がまだほんの子供のころに鉄の刃や鉄の切っ先が、石や貝の原始的道具に完全に取って代わっていたが、製作品自体、形はほとんどというか、まったく今日まで変化していないのである。長い生涯でトムは何百という木工品を作った—入れ子細工になった蓋のある箱、櫛、あか取り²⁵⁾、魚^{フィッシュ}を叩く棍棒^{クラッパー}、手斧の柄、柄杓、弓、矢柄、火鑽、格子、根堀り、ヤス、アザラシ狩や捕鯨の銚等々。彼はまた、木を削り貫いてカヌーを作るのを手伝い、若い頃にはまだ建てられていた大きな四角形の家屋の重い柱や梁を準備したり配置したこともたびたびあった。一方でトムは美術的装飾品にかけてはあまり進歩

21) 原文はa quarter mile from shore.

22) 原文はsalmon berry.

23) 原文はsoapberries.

24) 原文はkerfing.

25) 原文はbailer. 船底に浸水した水を汲みだす柄杓の一種。

しなかった。家の羽目板とか櫓への絵入れ、仮面とかガラガラ（鈴）などの実用品、装飾的な魚叩きの棍棒、家の柱などは彼の能力を超えるものだったので、頼まれれば彼よりもっと秀でた人たちに作ってもらうしかなかったのだ。トムが最も卓越したものの一つは、縦の長さであれ横幅であれ、望み通りの大きさに家の羽目板を準備することだった。若い頃は、余分の木材を持って村から村へとカヌーで動き回り、毛布やツノガイの数珠、乾し魚、鯨油、その他交換可能な品物と交換した。トムがやがて相当な富を備蓄することができたのは、漁や狩猟での個人的な成功というより、むしろ交易によるものだったし、彼が部族にあって現在の名誉ある地位を占めるに至ったのは、高貴な血統によるのではなく、ポトラッチや宴会で惜しみなくバラまくことを許したその財力であり、^{オポチューニティ}好運によるものだったのである。

トムや他の男たちは、ポトラッチを開いたりどこかの親戚を訪問したり、ビクトリアまで一っ走りするやで忙しくしてないときは、釣りに出るなり海中哺乳動物の狩りをするなり木工細工をしているが、女たちは食事の支度、食用の根毛の堀出し、ハマグリ如潮干狩りをしたりとか、これに類した仕事の合間に寸暇を惜しんで織物や毛布、莫座、籠を編んだりしたものだ。容器は木製のもの以外はすべて籠細工のものだが、各種多彩な^{マット}むしろが机や壁掛け、カーペットの役目を果たした。これらの籠やむしろの素材である、どこでも手に入るヒマラヤ杉の樹皮とかイ草はすぐに擦り切れるため、女たちは余分に取り替え用のものを準備して絶えず忙しかった。今でもヌートカ族の家に入れば、むしろや籠に柔らかくしたヒマラヤ杉の樹皮の切れ端で綾織りしたり、ヒマラヤ杉の樹皮の繊維を縄や袋に縊り合わせたり、磨き上げたシモツケの長い針でイ草のマットを縫ったりしている女を常に一人か、それ以上目にするものである。昔は家の中では常に、生の黄色ヒマラヤ杉の樹皮を鯨骨の波形タタキ²⁶⁾で分割したり、固い赤色ヒマラヤ杉の樹皮を半月形のシュレッダーで繊維性の塊にまで柔らかくするカタカタという音が聞こえたものだ。女たちはこの樹皮をほとんどどの程度の細さにも加工できる。実際揺籠の詰め物に使用される糸杉の^{ウール}毛糸の手触りは、ほとんど綿毛や綿の芯のように柔らかくフワフワしている。トムが子どもの頃、女たちは綾織りにせよ、縊り合わせにせよ、無地で装飾性のない籠とか、地味だが効果的なハンノキ染めの赤、泥染の黒の線で装飾した莫座しか作らなかった。しかしそれ以来彼女らは、黒や白の草を横編材に使用して写実的かつ幾何学的な模様で美しく装飾した、装身具入れの籠や、特殊な畳み織りの飾り板を作るようになった。この技巧はニティナツあるいは南ヌートカ出のトムの村民に伝わったが、もともとそれはフラッター岬のマカウ族²⁷⁾に多くを負っていた。白人との交易が、籠細工というこれら代表的な美術工芸品を作る

26) 原文はthe corrugated bark beaters of bone of whale.

27) ヌートカ族としては最南部の米国ワシントン州フラッター岬に居住する。天保三年（1832）十月、尾張知多郡を出た宝順丸が十四ヶ月の遭難の後にこの場所に漂着したことで知られる。

主たる動機なのである。

今日、ヌートカ族は小規模な木造の家屋に住んでおり、狭義の一家族が一つの家に暮らしている。トムが若い頃はそうではなかった。彼が育てられたヒクウイスの村は厚板の家が長く一列に並んでいて、それぞれの家はヒマラヤ杉の幹を切りそろえた柱からなる四角形の枠組と、その柱の上に置かれた円形部分のクロス梁の構造であった。屋根や壁はヒマラヤ杉で出来ており、縦方向に走っている。床は剥き出しの土間だが、踏み慣らして滑らかになっており、後方の横部分と、縦の両壁に沿って少しだけ高く、板敷にされて続いていた。内部の床の上には一つ、またはそれ以上の火が熾され、屋根板を一、二枚横にずらしただけの隙間から煙は逃れ出た。トムは幼い頃から家の中ではできるだけまっすぐ立たないようになった。煙穴の垂木が閉まっている雨期においては煙は特に家の上方で渦巻いており、目に悪いためなるたけ床の上に座るか、しゃがんだ姿勢でいるのが得策なのであった。トムが育った家のように、中には部族や、^{トライヴァル・サブディビジョン} ^{ハウスグループ} ^{クレスト} ^{エスカッチェン} その下位組織たる一族の首長の紋章、あるいは伝説的な盾型の紋章を示す絵画とか彫刻があった。トムの家の主たる紋章は壁板の外側に描かれた、睨み合った二羽の雷神鳥であり、屋根の上に空けられた一続きの円形の穴で、これは戸口として正面で使われるものもその一つだったが、いずれも月を表していたし、板の間の壇の下にわたされた板の狼の絵もそうだった。一族の首長は、身近の家族とともに家の後部を占め、他の少し階級の低い家族は首長との血縁関係が近い順で、その両側の色んな場所を占めた。奴隷もまた長い共同の家屋に住まった。彼らは首長の家族との関係がはっきりしない中流階級ではなくて、戦争の捕虜や、家財道具のように交換されたよそ者なのであった。個々の家族の寝台たる莫莖はこの板の間に誂えられられて、必要とあらば、互いに衝立てで区切られたのである。

このような家に住んで早くからトムは家族や親戚間の正確な関係を学んだ。間もなく近隣の^{ハウス・グループ} 家族集団との関係の度合いをも知った。彼は「兄弟」、「姉妹」という用語を身近な兄弟姉妹でなく、同じ世代に属する従兄弟たちにも近縁、遠縁を問わず適用した。これらすべての遠い兄弟姉妹に対する呼び方は、自分と彼らの実際の年齢の^{オールドター・ヤンガー} 上 下 によってではなく、自分自身の家系との^{スベリアー・インフェリアー} 上 下 関係によって使い分けた。次第に分かったことだが、自分にとっても先祖においても長子であることは地位と特権の双方において目上であることを意味した。それゆえ、長幼の用語はほとんど初めから、上下という強力な副次的色合いを帯びていたのだ。おそらく歳も年下のある従兄妹を「お姉さん」と呼ぶ愚かしさを彼が意識することは、彼女の身分上の高さを常に意識しているだけに、極めて少なかったのである。トムは長じるに従って、驚くべき数の「おじ」、「おば」、「じいちゃん」、「ばあちゃん」、無数の義理の兄弟が、近くもまた遠くもいることを知った。彼は非常に世間知の男となった。どこへ向こうと「おい、^{ヤンガー・ブラザー} おまえ、こっちおいで、^{グランド・ファーザー} とか「お爺さん、これを下さい」とかはいつでも言えた。知人の名前は、距離をおいてとか儀礼的な集会で呼びかけるだけのもので、ほとんどが付箋同様

のものでしかなかった。

個々の人間関係に対する感情とともに彼の中に育ってきたのは、村には部族の他にも下位集団が存在するという意識であった。住居、血縁、育ちにおいて自分が属しているツツイシャッアス族は、実際にはさまざまなより小規模の部族単位の寄り集まりであって、その中で全体の名前にもなっているツツイシャッアスリーディング・グループが最大の集団なのであった。その他の下位集団は、もともと戦役とか、数の減少による弱体化とか、友好的な離散・合併とかで、それぞれの独自性を失った個々の集団なのだった。この下位集団、もしくは一族セプトはそれぞれ、出所由来を示す伝説、独自の特権、村における住居、舊居跡、それから今もその成員によって記憶されている別個の漁場、狩猟場を持っていた。幾つかの「一族」が今や単一の種族としてともに暮らしているがその分団の根拠となったのは実は伝統的な地域性なのであった。一族という集団単位がおそらくもっとも明瞭に示されるのは儀礼的な集会においてであったろう。宴会において上席と看做される全席のうちで、一定数の隣り合わせの座席がツツイシャッアスの代表者に与えられたし、後部の右端の一定数の席が別の一族に与えられること、等々を彼はやがて知るに至った。このように、一族間の適正な位階性というものは、一定数の上席、下席の割当によって絶えず目の前に存在したのである。

しかしトムの子供時代、青年時代は完全に社会的、儀礼上の知識の習得のみに費やされたと推測してはならない。それどころか、少なくとも社会学と同じ彼が興味をもったのは遊びであった。彼は独楽—二つの釘が付いたかなり不細工なものだった—を廻したし、槍と草まとの的では狩猟用の槍を投げ、環廻しゲームでは羽飾りの薪を平らなバットで打ち据え、ビーバーの歯の骰子を投げた（しかしこれは主に女性のゲームである）。長ずれば、煽情的な歌の伴奏に合わせて数本の賭博骨ギャンプリング・ボーンズによって演じる「レハル」という、お気に入りの西部アメリカではほぼ普遍的な「あてっこゲーム」に参加した。もっとスポーツの領域に属するのはカヌー返しという幾分危険なゲームで、競技者は拍手による合図に従って自分のカヌーをひっくり返し、すぐに元に戻す早さを競うのである。これは特にトムが気に入っていたゲームだった。視力を失ってしまった現在まで、これまでの生涯を通じて彼は本能的に水の流りに敏感で詳しく、カヌーの漬け方、傾ける角度、櫂の返し方などには陸上で歩く動作と同じくらい、通じていた。実際、季節によって彼の生活は強情にも四日ぶっ続けで、上下する波の律動リズムに合わせて流れて行ったのである。

様々な活動や信仰の中で少なくとも一つだけ、トムが父方、母方の叔父から常にはっきりと指導を受けたものがあつた。それは不可視の事物に属する世界で呪術、つまりは超自然的なコンペリング・アクト、プリベンティブ・タブー強制的行為とか防御的禁忌からなる、神秘的な領域である。もし彼が狩猟とか漁で成功を取めなければ、もし目には見えないがしかし、絶えず存在する諸力が諸事において庇護を受けることを確実にしたければ、あるいは、すくなくとも災害が我が身に及ぶことを避けたいのなら、

彼にはやらないように又避けるように注意すべきことが何百とあった。特に超自然的な力に腹を立てたりしてはならなかったが、この中には不浄の事物との接触によって汚染されることで海の魚類、哺乳動物を怒らすことが入っている—すべての触穢の中で最も忌避されるのは月経期、あるいは妊娠期の女性の存在による影響力である。例えば、アザラシ狩りやトドのハンターはカヌーを水際まで引き摺ってはずらず、抱えて行かねばならない、さもなくば、ごみクズの上とか、月経の女の通った地点に触れてしまい、獲物が恐れて逃げってしまうような臭いが付着するから、というのだ。それに海上で狩りをするとき、言葉には注意しなければならない。これについての興味ある例として次のような話がある。それによればオットセイ狩りは流木を集めるときの言葉で話されるということで、オットセイ自体が「向こうの木の下にいるもの」と言う風に表現されるのである。狩りをしている間に何が起きているかをあまり正確に分からせてしまっはいけないのだ！トムが生涯学びまた実践してきた様々なタブーはほとんど無数にあって、自分の成功と長寿はそれらすべてを忠実に遵守してきたおかげだと彼はほとんど信じている。

タブーは概ね自己防御のための措置である。しかしトムは呪術の世界には自分の意志を働かせるもっと積極的な方法があるのを学んだ。これらの一つは、ある種のお守りを身に付けたり、家の中とか森の中に隠したり、狩猟道具とか釣り道具に関連するものに潜ませたりすることである。普通の魔除け用お守りとして彼はギンザメの背骨を帽子の中に入れるのを好んだ。父親が死ぬ間際にトムを呼んで彼の耳に重要な秘密を囁いた。これは、この家族の主要な生命保護のお守りはあらゆる種類のがらくたがしまい込まれた古い箱の底に隠してある火鎗だということなのであった。その効験はもっぱら、ほとんど誰もそれを知らないという事実に基づいている。一般的に、秘密ということが、あらゆる呪物や呪文の効力の発揮において途轍もなく役立つのである。インディアンは、経済的な逼迫とか死の接近とかによって、やむなく自分に近い大事な誰かに呪術的知識を伝授せざるを得ない、そのときまで、たとえ最も近い肉親に対してでもできるだけ隠しておくのを好むものである。一番強力なお守りをトムはカヌーの中とか、狩猟用の槍の柄の周辺に巻いた桜の樹皮の覆いの中に隠したものだ。これらの護符は各種のものだが、主に森の中で手に入れた超自然的な動物の破片—目の見えない蛇、蟹、蜘蛛とか—である。

ある人々は超自然的な存在や顕現によって、狩猟、漁、富、愛情、治療、呪術—あるいはその他何であれ—のための力を得るほど好運である。お守りは神秘的、あるいは人里離れた辺鄙な場所—大海原、遠い島、山の頂上、森の奥—などでよく起こる、こうした経験に関連して手に入れることがしばしばある。それにまた、あらゆる神秘の中でも、この砂浜とか、広い海によく馴染む沿岸の村人を最も魅了したり、畏怖の念を起こさせたりするのは暗い森の神秘なのである。この超自然的な力を賦与するものは、多種多様でしかも奇怪な事物である—地中から指差す神秘の双腕、鱗を生やし、ナイフのような舌先の稲妻の蛇、妖精のような存在、気ま

トリー・ニンフ、ホップゴブリン、オウガー、ぐれな木の精、子鬼、人食い鬼、さらには悪夢の中から飛び出してきたかのような奇妙な間の子の動物。これら超自然界の住民すべては拒めば、無事ではすまないような力を持っているのだ。この力を一旦手に入れたならば、必要とされるタブーの厳守によって注意を払い有効に利用しなければならない。

トムはある人々ほど多くの超自然体験があるわけではないが、それでも二、三の驚嘆すべき超自然的存在の訪問によって恩恵を受けた。チミミスという名前で知られている奇妙な富をもたらす種類の小人めいた存在が、ある夕方他に二人の男と一緒に座っていたとき現れた。これらの連れはチミミスの方に眼を向けていたにもかかわらず、その存在に気づかなかった。トムのみが、驚きのあまり声が出なかったが、この子鬼が家の屋根に二本の槍をおいて、隣家の方に歩いて行き、それから丸木の中に消えたように思えた。我に返ると、彼はチミミスの手が掴んでいた槍の柄の部分を削り落とした。その削り落としたものをお守りとしてしまっておくと、やがて部族の中でも裕福な一人となったというわけである。

またあるとき、トムはフル・アイド眼パッチリという名で知られている、小柄でブラウニー²⁸⁾とよく似た超自然的存在から力を貰った。体調を崩し家の中で横臥していたときだったが、炉の火をじっと見続けているうちに、突如、小さな燃えさしがパッと立っておもわず眼を上げた。時計廻りと反対の方向へ、これは踊りにおけるヌートカ族の方向とは正反対なのだが、火の周りを子供が廻っているように思えた。すぐさま眼パッチリだとわかった。このブラウニーは、胸に小さな収納箱を持ち運び、床にあるもので手に触れるものなら何でも拾い上げてしまった。それまでまっすぐ座り直すこともできなかったものが、この超自然的体験によって簡単に座ることができるよう力が注入されたのである。彼はまた、このときから自分の家には目で見えるよりも早く、富が転がり込んでくることを信じた。トムの三番目の超自然的体験は、前の二つほど派手ではないが、実質的な結果の点においては、同じくらい強力なものであった。真冬のこと、家の中の板敷きに横臥していたときに、寝床の頭先を示す箱の上に置いている収納箱の一つに奇妙な物を見つけた。大きな黒いマルハナバチが子バチを産んだのを知った。通常ハチの出産は夏にしか行なわれないので、これは驚くべきことであつ明らかに重要なことだった。これほど異常な出来事のたった一人の目撃者だったので、富の蓄積に関してより一層の恩恵を受けた次第である。

こうした異常事の発生はあきらかに偶然の性質を帯びており、実人生における職業的成功のために必要不可欠な助力という点においてあてにするわけにはいかない。標準というか、大体

28) 原文はbrownie. スコットランド伝説に登場し、夜間現れて秘かに農家のまわり仕事をするという小妖精。

においてこうした必要な援助を確保する上で最も有効な手段は、秘密裡に儀式を行うことである。修行において相当な艱難辛苦を体験しなければ、何者も訪れはしない。これをトムは幼い頃から知っていた。もし、漁師や、海上動物、陸上動物の猟師として成功したければ、しばしば森に入出入りするそれぞれの家族にしか知られないような、森の秘部に引き籠って何シーズンを過ごさなくてはならない。ここで彼は何日間もぶっ通しで水浴したり、皮膚が苦痛でヒリヒリしてくるまでツゲの枝で擦ったり、永生と成功のために^{スカイ・チーフ}天空の首長に祈ったものだし、とりわけ模倣の原理に基づいて秘密の呪術的行を実践したものであった。もしアザラシ狩りでの力を得たいのなら、そのアザラシ、銚打ち道具、狩りのためのカヌーを表す小枝の像を作らなければならない。成功を大望するものは、この呪術的な設定において未来の狩りを劇化するつもりでいなければならない。彼自身も自ら模倣行為を行い、成功のために絶えず祈りを上げた。これらの準備期間は肉体の忍耐力を極限まで試すものであった。断食、不眠、禁欲、それとあらゆる種類のタブーの遵守が修行の一部を形成した。もし必要な呪術的準備を体験するほど意志が固ければ、望んで学べないものはほとんどないのである。異常なほどの野心に燃える若者は、たとえそれが捕鯨の成功であれ、強力なシャーマンの能力の獲得であれ、厳しい呪術的な修行過程の一つ一つにしっかりと魂の目を据えながら、意志を鍛え、信じられぬほど長い期間にわたって肉欲の叫びをも抑制するであろう。

トムは呪力の獲得に関して特別厳しい修行に専念したわけではない。彼はアザラシ狩り、鮭のヤス刺し、^{トロール}流し釣り、オヒョウ釣り、罟を使つての鱈刺し、財蓄、儀礼の準備、また彼を陥れようとする悪意を持つ人間の妖術に対抗できるシャーマンの能力を得るために要請される通常の手順に満足していた。彼は捕鯨やトド狩りとして成功を収めるのに要求されるさらに難易度の高い、心身を疲弊させるような成巫過程には取えて挑もうとはしなかった。殊更秘儀とされるものの中で、トムが試みたのはたったひとつだけである。中年を過ぎたころ、彼は鴉の言語を理解する能力を手に入れようとして野心に燃えた。鴉はヌートカ族の信仰においてはあらゆる生き物の中で最も恐ろしく、不気味な動物、狼の超自然的な使者と信じられている。トムがこの超自然的な鳥類の囁いた鳴き声の中に隠された数々の謎を解読できるようになっていたら、部族の仲間たちを遥かに凌駕するほど、祭儀に関する能力を向上せしめたことはほとんど疑いを入れない。不幸ながら、この難解な知識の探求を彼はあまりにも徒勞多く、厄介なものと断じてしまった。彼は溜息まじりに失敗を認めているのである。

秘儀というものは、月が大きくなり、日々が段々と長くなる縁起のよい期間にのみ行われるものだ。トムが常に非常な注意を払って時の経過と月の循環を記録しているのはこのためなのである。もしあまり賢明でもなく注意力もない隣人の誰かが、月の位相の判断を誤り、時期を逸した巫儀を行ってしまったとしてもトムは何も言わないだろう。狩りの季節が巡ってくる時、隣人の努力は必ず失敗することをよく知っているのだから、微笑して何も助言しないであろう。トム

は決して隣人を誑かしたり、彼らのツキをなくしてしまうような異常行為をするような人間ではないが、さりとして彼らの不運を見て心から同情したわけではなかった。彼らの過ちを正したり、わざわざ仮想の競争相手の腕を上げたりしてするようなことにはまるで関心がなかった。

メディスンマン

クエスツ・オヴ・マジカル・アシスタンス

呪医は、その他のあらゆる呪術的援助の探求に酷似した方法で力を獲得する。違いはただ、彼らは病気を治したり、魔術に対抗したりするために力を貸すことが知られている諸力の援助を求めるだけに過ぎないのだ。普通はある種の鳥とか珍しい魚であるが、呪医は手に入れた保護物や護符などは彼らの胸の奥にしまい込んでいる。それらは病気の発見、病人の治療、あるいは邪悪な敵に打ち勝つときに必要とされ、呼び出されて術者の意のままに望む目的地に人知れず飛んで行き、また帰ってくるのである。トム自身はマガモ²⁹⁾の力を少々手に入れたが、自分を正式な医者と考えるほどの確証は持っていない。彼はまた、ニティナト族の先祖から受け継いだ一種のシャーマン的能力、すなわち特権を持っている。ツッアヤック教の一部を構成するシャーマン公演会で彼の長男が、自ら呪医を実践しているわけでもないのに祭儀のある一点で見習いシャーマンを教育する権利を持っているのはこの理由によるのだ。

ヌートカ族の多くが、食べ物、爪切り、体臭などの操作にせよ、憎んでいる人の名前と像に関して恐ろしい呪文を唱えることであれ、敵や競争相手を誑かせる力を得たということで罪に問われている。トムはこのような卑しい精神活動に耽ったことはないが、知人の多くがやってきたと確信している。妖術に対する恐れが絶えずあるのでこのために今日でもインディアンは家の周りに多くの犬を飼っており、また夜間、戸の施錠を厳重にするのもこのためなのだ。犬の吠え声は悪意による「痛み」と、特に夜にうろつき回る微細な病原体に注意をよび醒ます上で有効であるが、ドアの施錠はこれらの物質を侵入させない意味でも不可欠なのである。空の首長、雷神鳥、狼のようなヌートカ族の信仰における偉大な超自然的存在は祈祷においてであれ、儀式においてであれ、トムの生活で大きく浮上して来た。ヌートカ族の中には人並み以上に深い信仰の持ち主もいる。彼らは祈りに対して他人より熱烈で、神聖な存在に対して聖なる儀礼を行う際により大きな忘我の状態になるべく自分を鼓舞するのである。この型の人々に比べるとトムは常にかなり醒めていて決して懐疑的ではないが、情緒的な熱狂家ではない。儀礼的な祭礼に関する彼の知識は膨大であるが、この知識を活かす精神の方は整然と秩序立ち、法律家並に詳細にまで及んでおり、霊的な忘我に陥るタイプではない。実際の経済界における利益の追求の方がずっとトムの気質には適合していた。だからと言ってトムが不可視の世界に関し万事合理主義者であるということではない。高等教育を受けまた生半可な教養を持つ白人との混血児のみが、合理主義者なのであって、懐疑主義的な議論によって不安に陥れようとする、その軽率なやり方に対してトムが腹を立てた相手は、一人や二人ではなかった。しかしト

29) 原文はthe mallard ducks.

ムの考えは何ら変りはしなかった。自分の名前を知っているように確固として、雷が山の方から轟けば、それは雷神鳥が山頂の住処を離れ、翼を大きく羽搏きながら鯨を餌食にすべく海に向かって飛んでいるからだと思っていた。彼はまた、自分のような盲人と異なり目の見える人たちが、稲妻が光ったと教えてくれれば、それは雷神鳥が腰に巻きつけたベルトを落としたからなのであった。このベルトは光る蛇で、稲妻は蛇がジグザグに光りながら地面に落ちたり、ヒマラヤ杉のあたりでピカッと光ったのはそこで蛇がとぐろを巻いたからなのである。

生計を立てるといふ基本的な問題はさておき、ヌートカ族の主な関心は惜しみなく富を散財することによって同胞たる部族員の評価を勝ち獲ることである。富を蓄積して安楽に暮らすだけでは十分ではないのである。ときどき部族内の他の家族や近隣の家族をポトラッチとして知られる公式の祝い事に招待しなければならないが、ここにおいて所有を認められた特権のうちの一つかそれ以上のものが、客人への散財によって示され賞賛されるわけだ。権利を展示するには幾つかの形式がある。そのうち最も重要なのは、板の上、あるいは最近のように布キャンバスの上に描かれる絵として、または踊りの中で象徴物として示されるかもしれないが、先祖の紋章に関連したものである。儀礼的な試合ゲームもまたある種のポトラッチでは特権の展示としてよく行われる。ほとんどすべての特権には固有の歌がついているが、この歌自身がまた油断なく守られる権利であって、それらはこうした機会に歌われるのである。

比較的重要な権利の公示にあたってそれを最大限重要なものに変えるには二つの配慮が必要だ。まず一つは、劇によって示される始源オリジン・ミスの神話を語ることによって、またこの特権の創始者との個人的関係を跡づけることによって、その演し物に対して自分が所有する権利の由縁を明瞭に示すことである。第二に、特権の公的提示に当たっては、既に家族の間で分配した資産と少なくとも同じくらいの財を散財するように気をつけねばならない。仮にも可能ならば、己れ自身および身の回りにいる家族だけでなく、その権利それ自体の公的な威信を増やすべく従来の記録を塗り替えようと奮闘するであろう。従って重要なポトラッチは軽々しく行っただけではならないのである。それは非常な気配りと周到な準備を必要とするし、歌い手や、その他の助っ人などが提供するサービス、客人には相当な贈り物をしたり、参加した大勢の男女、子供などに支払うだけの富を掻き集めることが不可欠なのだ。

ポトラッチが、単なる富の顕示として行われることはそれほど多くはない。ほとんど常にそれは名前の譲渡とか、娘の結婚適齢期とか、婚礼の披露宴、狼祭典、あるいは成ドクターリング・セレモニー巫式とか、なにかはっきりした社会的、宗教的な役割と結びついているのである。ポトラッチは換言すれば、財産を客人に譲るという意味であって、根本的な意味で大小、聖俗を問わず実質的にあらゆる儀式に必然的なものである。すべてのポトラッチには三つの面がある、つまり主催者、招待客、およびポトラッチにおいて祝われる当の人物である。これらの最後の要素は、幼い段階でその威信を高めなければならない、家族の中の若い成員であるが、主催者に労働サービスを提供して

きた他人であるかも知れない。贈り物には何種類もある。それらのあるものは、部族の最高位のものが資格を有する公式の証書であるが、それらは次のポトラッチにおいて100%の利子をつけて支払うことが期待される。また別種の贈答品、ポトラッチの最も重要で絵になる部分という性格をもつもの、が招待客の中で最高位のものに与えられる。これらの贈り物の返礼に関して厳格な規則はないが、実際には同等か、多くの場合にそれ以上の額の贈り物を返しのポトラッチを行って清算している。最後にポトラッチがお開きになるころ、参加した多くの客全員に小額の祝儀を配る。こうした贈り物に対しては先の二つの種類ほど、そのお返しが配慮されることは少ない。ポトラッチの開催は多少は財産の投資と看做されるとしても、しかしヌートカ族同士でポトラッチで被った支出の大部分が、もとの所有者に戻ってきたかどうかは疑わしい。

ポトラッチは開催者にとって社会的、経済的目的の面で明らかに有効であるばかりでなく、同様に、出席した個々の人々の労働に対する公的な謝礼というように、資産の小配分という機会をも提供しているのである。実際、ある権利の譲渡とか、改名のような重大事の発表はポトラッチにおいてきわめて適切に行われたものだ。どの点から見ても、集まった部族員や招待客はこのような発表の証人となるのである。

トムはまだ青年のころに自分のためにポトラッチの開催をやり始めた。彼の責任において行われた最初の重要なものの一つは姪の主人を祝うポトラッチだった。この男は生まれが卑しいためにトムは自分には関係ないと突っぱねたものだった。しかし姪に子供が生まれてからは折れ、家族の名誉にキズを付けるこの汚点を払拭するために親戚三十人を呼んでそれぞれに、銃を四挺と毛布一枚を配ったのだった。また、自分の所有する歌のうちの二つを唱ったが、それらはその場で、生まれた子に正当な権利として譲り渡した。このポトラッチは生まれが低い男との和解を画するというだけでなく、生まれた子供に人生という順位を競うレースにおいて公平なスタートを与える意味もあったのである。次のポトラッチは^{ウルフ・リチュアル}狼祭りというもので、このとき彼は雷神鳥踊りと狼踊りという祝賀の踊りを二つ披露したが、ことに後者においては四つん這いになってぐるぐると廻った。

それからしばらくして、トムはウイツァウというツイシャッアスの女性と結婚することになった。彼女は同族の娘であるけれども、自分はツイシャッアスとしてでなく、父方に親戚がいるニティナト族の一員としてこの娘に求婚したのである。父親は既に死んでいたもので、自分に代わって十人のおじに結婚を申し込んでもらった。婚儀の準備において求婚は常にその重要な一部であり、主として求婚者の特権の一つかそれ以上を象徴する品物を娘の家族の住む家の外に置くことから成る。求婚者自身は参加しない。時として受け取りを拒否されることがあるが、求婚者は受理されるまで続けるかも知れない。必ずそうなるという保証はないのだが。トムの代理人が置いた特権というのは、稲妻の蛇を表す十の火と、一つの彫り物から構成され

ていた。これらは受理されて、婚儀を進めて欲しいとする花嫁の父の側の意志を示すものとしてトムのおじに返却された。この特権の返却後間もなく、ツツイシャッス族の間で結婚式が執り行われた。このときトムとニティナト族の親戚が配った金が結納金ブライダル・パーチャスとなったのだが、これはトムに最初の子が生まれたときに、トムとニティナトの親戚に利子をつけて返された。

結婚式の大部分は祝典競技セレモニアル・ゲームの演技であって、その一つ一つには特別な歌と、財産の分配がこれに伴うのである。これらの競技は花嫁を射止めるのがいかに難しいかを象徴するものであり、求婚者が花嫁の父に認められるそれまでに、耐え忍ばねばならない伝説的な試練を述べたものである。その試練の一つは例えば、特別重い石を持ち上げたり、二つの火の合い間で怯むことなくしばらくの間、立っているということかも知れない。文化人類学によれば、このような試練は花婿自身が耐え忍ぶものであるが、しかし実際、祝典儀礼においては新郎側の誰かが競技における勝者となって新婦の父親から賞品を受け取ることもありうるし、また、新婦側の誰かが、個々の競技の特権を誇らしげに受け取ることもある。

結婚後間もなく、トムは一月のあいだで二回のポトラッチを開いた。その一つは彼の幼い妹ビューパティの初潮を祝うものであった。二番目のものは彼の初めての子、長男の出産祝い、ヌートカでネイヴル・フィーストは「臍の緒祝い」と言うが、であった。ほぼ一年後にトムはヌートカの一族であるウクリュエレット族を祝宴に招いて、多くの踊りの権利が演じられ、また相当な資産が配られた。このときまでにトムは、急速な富の拡張とポトラッチの開催でヴァンクーヴァー島の西岸の諸族の間ではかなり著名な人物となっていた。従って北部ヌートカ族の有力な一部族、アハウスタの族長が、特に彼をポトラッチに招待してくれ、この族長の祝賀の歌を四つもくれたことも、大いに感謝すべきことではあっても驚くには当たらなかったのであるが。返礼として、アハウスタ族とコマックス族、島の東岸にいて異なる言語を話す部族、をポトラッチに呼んだ。前者に四百枚の毛布、後者に三百枚の毛布を配ったのである。

このポトラッチの一、二年後に、トムの社会的経歴において決定的な出来事が起こった。長女の誕生である。最も派手なヌートカのポトラッチはたいてい娘の初潮を祝いに関連して開かれたときである。結婚以来トムはやがて時が満ちたら、部族内でポトラッチの記録を作り、娘の初潮祝いにおいて最も価値のある特権を示すことができる機会を待ち望んできた。今や現実にかわいい娘の誕生によって祝福されたので、トムの計画はすぐさま実行に移された。彼は従来以上熱心に財産を蓄え始め、インディアン同士で、また白人との間で多くの抜け目ない商売に乗り出して、心の中ではどの部族を招待しようか、またどんな演劇や踊りや歌を来るべき一大セレモニーの折に用いようかなどとしばしば考えたのである。まず第一の関心事は客人をツツイシャッス族に招いたときに入れる、先祖伝来の大家屋を建てることだった。柱や梁に適した木材は容易に手に入るものではない、特に白人の製材所がこの地方にも出現してからは。それゆえトムは多くの人を尋ね歩き、大きさが十分でしかも伐採に便利な場所にあるヒマラヤ

杉をその目で探し求めて疲れを知らなかった。そのような木を見つけて切り倒し、ソマス川に沿ってツイシャッアス村まで運び、機会が来るまで保管した。実際に家の建築を始めるまでに要した期間はこうして十年から十五年に延長したのだった。あるとき、不運な事故が起こった。重いクロス梁の一つが地面に落ちて幸いにも怪我人はなかったがしかし、このことは凶兆と考えられた。それでもトムは梁の精霊のために踊りの会を催して邪悪な力を回避するために全力を尽くした。このために所有する特別な歌がこのときに唱われた。

トムは娘が成人するまでに家を完成できるだろうと思っていた。だが、失望するのは予め決まったようなものだった。家がまだクロス梁の一本を欠き、軽い木工部分の仕上げもできていないある朝、娘が大人になった、つまり、初潮を迎えたことを妻から報告されたのである。正式の成人式は数ヶ月後を取っておいて、すぐさま初潮祝いを行うことしか他に手はなかった。トムは自分の顔を赤く塗り、隣接するホパチアスアス族を「大地に松明を立てる」³⁰⁾と言われる成人式に招いたのである。

この式は娘が隔離される期間の始まりを画すものだ。このとき娘は彩色を施されて通常家族に属するこの伝説的 インシグニア 記章で飾られ、雷神鳥と鯨の絵図を描いた二本の長い板の前に立たされ、足下に四回水を撒かれるのである。四本か十本の、いわゆる「松明」に火が灯され、受け取る資格のある人々に贈り物と一緒にこれはあとで配られる。何通りかの歌、特に オボジット・セックス 女性を嘲る風刺的な歌が唱われる。のちの結婚というゲームを先取りする記念の試合が行われ、賞品が配られる。全員に引き出物が配られて客人が帰ったあと、残された娘は四日間の断食と、家の後部に置かれた様々な絵が描かれている板の背後で何通りかのタブーのための隔離期間に入るのである。

成人式のあと、差し迫ったポトラッチ用の品物を貯える目的でヴィクトリアまでトムは足を運んだ。彼は膨大な数の箱入りビスケットを買ったが、今日までいかにこの特注によって白人商人をまげさせて特別料金で購入したかを語るときほど、彼を嬉しがらせるものはない。準備品が無事村に保管されるとトムは十二の部族をポトラッチに招いた。比較的近い部族には使者をたて、より遠隔の東海岸の部族は自ら出向いて招待した。約束当日となったが、一度でこれほど多数の客がこれまでこのツイシャッアス部族を訪れたことはなかった。それはトムの生涯で最も誇り高い瞬間であった。すべて順調に行った。食物は全員に十分に行き渡ったし、財産の分配も気前よく、あらゆる特権が面白く演じられた。演じられた権利はかなりの数に上ったが、そのうちの一つ、二つは最大のポトラッチ ポトラッチャーズ 開催者である最北ヌートカ族にも斬新に思えたほどなかなか手が込んだ演劇であった。これらの演劇、踊り、歌を先祖代々所有してきたというトムの主張は司会者によって細心の配慮をもって説明された。先祖伝来の伝説はどの場合

30) 原文は“torches standing on the ground”。

でも最後に語られた。鯨と雷神鳥からなる特別な紋章に対するトムTomの所有権もきちんとに説明された。彫刻入りの家柱について司会者は一人の女性の太腿から最初のツイシャッアスTwi-sha-asが生まれたところまで遡って説明した。これらの創世神話によくあることだが、相当な部分が洪水伝説に拠っている。このポトラッチはこの島のインディアンにおけるトムTomの地位を確実なものにした。今日に至るまでそれは、ツイシャッアス族および近隣の諸族でしばしば引き合いに出されるほどだ。トムTomの一家はこれまで以上に「高い評価」を得た。トムTomの孫が比較的馴染みの薄い部族、例えば東海岸の諸族を訪れたときに、歓迎されて大変高価な土産をもらったのもみんな祖父のポトラッチのおかげだと思ったのも一度ならずであった。

トムTomが開いたポトラッチはこれで終わらなかった。このすこしあとでクワキウトルKwakiwutlに隣接するヌートカ族Nootkaの一部族キュークオットKwukwotを招いた。この会で二羽の雷神鳥、潮を吹く鯨、ヘッナHennaという名で知られる天然の石英の生き物、ミウタチMiwatciこれは一種のマガンであり天辺にある二つの浮囊³¹⁾と呼ばれる山の天辺に出没するーを含む特権を幾つか演劇として披露したのである。ヌートカNootkaのヘシクウイアト族Hesikwiatが次に別のポトラッチに呼ばれた。この一、二年後に二度目の狼祭り、つまりトロクワナTrokwanaという形でトムTomの経歴においても式典としては二番目に大きいものが開かれた。この式典はトムTomの長男と新婚の妻を特別に祝うに行われた。彼ら二人はこの儀式に参入する主な入会者だった。奇妙なことにまだ生まれていないトムTomの孫までが加入させられたのである。これはヌートカ・インディアンNootka-Indianが彼らの子孫の名誉をできるだけ早い機会から積み上げてやりたいとする傾向が表れた極端な例である。

狼祭りはヌートカNootkaが保有する式典のうちでも最も厳粛でもっとも魅力的なものである。彼らが示しうごのような宗教の高揚であれ、熱狂状態であれ、すべてこの複雑な儀式の中にその表現が見出される。できれば冬にふつう丸八日間続くこの演劇はこの村の周辺部をうろつき回ると信じられている狼の魂に支配される。この祝典のより重要部分は入会を許された部族員のみが開かれている。多くのタブーが参加者によって守られなければならないし、また高度な精神的厳粛さが維持されなければならない。昔は、もちろん祝典の道化部分は論外だが、より厳粛な宗教的部分での軽々しい言動は警官フリッヴォリティによって厳しく罰せられた。最も神聖なタブーに違反したらその場で槍で刺し抜かれるという刑罰を受けた。

この儀式はいくつかの歌と、他に通常のポトラッチで行う儀典とともに開始する。村の界限で狼が出たという噂が流れ始める。この噂は、運よく難を逃れたとか死傷者が出たとかの話に増幅されて子供たちの想像力を強力に刺激して彼らはまもなくパニック状態に陥る。と突然灯りが消され、四匹の狼が、家の横手から侵入する。続いて起こる混乱状態で彼ら大人は、一番幼い加入定者と一緒に逃げる。この瞬間から式典の重要部分が始まる。部族の何人かが「狼の

31) 原文は“Two-bladders-on its-summits”。

役」を演じる世襲的な権利を持っていて、儀式のある部分において村の境界を越えて新参者と一緒に逃げ、これらのものを森の中に囚人として幽閉するのである。数日間、捕囚となった新入りを連れ戻そうとする無駄な試みがあることになっているが、狼には改悛の情がなくやがてある幾つかの歌が唱われるとようやく新参の子供たちが人々の前に連れて来られる、それから何回かの攻撃が成功し狼を森から撃退させる。新参者は様々な超自然的存在の霊に取り憑かれて半狂乱になるものと考えられる。彼らは力づくで連れ戻されなければならない。そうする特権のあるものが彼らを自由にし、聖なる歌の伴奏とともに抵抗する新参の連中がこの間ずっと騒々しいほどに笛の音が鳴り響いているポトラッチの家へ導かれるのである。笛や太鼓に、それぞれが異なる多くの歌が斉唱される喧噪が夜遅くまで続いて行く。その騒々しさはとても筆では表現できない。次の日は日中ずっと、この式典における最も聖なる挿話が演じられる。新入りに取り憑いた笛の霊は聖なる踊りと歌によって追い払わなくてはならない。川や海での水垢離による清めの儀式がこれに続く。儀式の残りの部分では、若干の特別な踊りが演じられるのだが、その踊りのそれぞれは新加入者に取り憑いたと思われる個々の超自然的存在に対応している。これらの踊りには幾つもあって特権次第で威厳も違えば、宗教的な熱狂の度合いも違う。踊りのうちでおそらく最も厳めしいのは、怖れも知らず破壊を求めて這い回り、数人ががりの参列者によってようやくのこと取り押さえねばならない、超自然的な狼のそれであろう。他の踊りは様々な森の生き物や人食いの邪鬼を表している。その多くは動物をパントマイムで演じたものだが、人間の色々な活動を表現したものもある。この狼祭りをもってトム祝賀活動は次第に弱まっていった。家族によって開かれるポトラッチならどんなものでも、彼は強い興味を持ち続けたし、しばしば助言をし、歌を唱うことや式の演説—特に公式な謝辞にかけては—などでは盛んな援助を惜しまなかった。今や家族の栄光を築き上げる自分の責任を果たしたので、少なくとも形の上では彼は引退して、部族の中での彼らの地位に影響を及ぼすほどの式典ではすべてにおいて長男の率先垂範を許したわけである。

トムが有益な仕事から離れてすでに久しい。彼は今、全面的に長男の家族の世話になっていて、彼らと一緒に暮らしているが、その存在が重荷と考えられてはいない。一つには、一貫して彼は善意であるし、自分の過去の話とか隣人の判断にかけても非常な話し好きでもあり、それがポトラッチの準備であるか、アザラシの所有権をめぐる争いであるかを問わず、重要なことなら常に助言をして手助けしようとしているからである。現在の騒々しくてみずぼらしいトムの背後には、昔日の偉大なポトラッチ開催者としてのトムが大きく浮かび上がってくる。彼の子供たちや孫たちが部族内で維持している高い地位はまったくこのトムのおかげなのであるから。

トムが死んだら棺桶に入れられて土の中に埋められるだろう。これは古いヌートカの風習にはなかった。有力な家族は死者を遠くに葬る洞穴を持っていたし、その他の家族は埋葬用の箱

かイ草の筵に寝かせて村の背後の森の木の上に置いて風葬にした。埋葬地の近くには家の垂木を外し、その上に故人の紋章の一つを描いた墓標が立てられた。

古い埋葬の習慣はもはや守られていないが、死に伴う信仰や風習の一部はまだ完全に廃れてはいない。したがって死者の直接の影響力は相当に増えた財産とともに常に廃棄される。かつては家全体が焼却されたかも知れないし、遺された家族は別の場所に移転して新たに家建てたという話も聞く。トムトムの死後はおそらく、直ちに遺族を慰めるためと、彼の^{スピリット}霊が家とその近辺に留まることのないように、という意味で葬式が執り行われるであろう。トムトムの^{ソウル}魂は小さな影のような生霊となって頭の天辺から身体を離れて行き、最終的には本物の幽霊となってしまふのであろう。死者の名前に関するタブーを守るように非常な注意が払われると思ってよい。トムの名は一定期間、部族間で口にされないのみでなく、その名前の中の主たる構成要素を含む語がすべて意識的に回避される。この要素は「遠く隔たった」という意味を明示している。人々は遠回しに言うとか、代用できそうな何か他の語の持つ意味を援用するとか、あるいは必要とあらば別の^{ダイアレクト}方言から仮に発音が違っててもそれに相当する意味を持つ要素を借用するとかして、出来る限りその名前を使わずに暮らして行かなければならないだろう。トムトムの死後しばらくは、挽歌が聞かれるであろうし、おそらく服喪のポトラッチでは、この家族に属する特権の幾つか、例えば四つの歌が捨てられることになる。このような権利（の使用）は服喪期間ではタブーとされている。一年から十年に及ぶかも知れないが、服喪期間の終わりに家族の一人によって別のポトラッチが開かれてタブーが解除される。そのときが来ると、トムトムの名前は既にヌートカの歴史の中に移っているであろう。その名前、サヤチャップス、誰よりも高く立つ者はそのとき誇りと羨望を持って自由に使われることだろう。

エドワード・サピア³²⁾

32) Edward Sapir (1884~1939)。本編の作者であり、原著の共同執筆者の一人。アメリカの著名な言語学者であり文化人類学者でもある。ドイツ生まれで子供のときに家族とともにアメリカに移住。コロンビア大学で民族学、インディアンインディアンの言語を学び、同じく本書の共同執筆者でもあるフランツ・ポアズフランツ・ポアズに師事した。主著は *Language, an Introduction to the Study of Speech* (1921), 邦訳: 安藤貞雄訳『言語—言葉の研究序説』(岩波文庫, 1998年)。ヌートカ族に関して以下四つの論文がある。A Flood Legend of the Nootka Indians of Vancouver Island (*Journal of American Folklore*, 1919, PP. 351-355); A Girl's Puberty Ceremony among Nootka Indians (*Transaction of the Royal Society of Canada*, 3rd series, vol. VII, 1913, PP. 67-80); Some Aspects of Nootka Language and Culture (*American Anthropologist*, N.S., vol. XIII, 1911, pp. 15-28); Vancouver Island, Indians of (in Hasting's *Encyclopaedia of Religion and Ethics*; deals with Nootka religion).

参考文献

1. 和文のもの

アッシャー, R. E.・モーズレイ, C編『世界民族言語地図』土田滋他訳, 東洋書林, 2000年
大島稔「ヌートカ」『言語学大辞典 第三巻－世界言語編下1－』亀井孝他編著, 三省堂,
1992, 6-9

クラックホーン, C『人間のための鏡』光延明洋訳, サイマル出版会, 1971年

祖父江孝男「ヌートカ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 1987年

古屋安雄「長老派教会」『アメリカを知る事典』平凡社, 2003年

2. 英文のもの

Arima, Eugene Dewhirst, John. “Nootkans of Vancouver Island”, *Handbook of North American Indians, vol.7, Northwest Coast*, ed.by Wayne Suttles, Smithsonian Institution, Washington, 1990, 391-411.

Pilling, Arnold R. “Yurok”, *Handbook of North American Indians, vol.8, California*, ed. by Robert F. Heizer, Smithsonian Institution, Washington, 1978, 137-154.

付記：本訳稿はエルシー・クルーズ・パーソンズ編著／神徳昭甫訳「北米インディアンの生活 (9)－23部族の伝承と習慣」『富山大学人文学部紀要』(第46号, 2007年2月)の続編である。なお、最後になるが、ヌートカ語の発音に関して同僚の富山大学教授呉人恵氏に多々ご教授賜った。厚く御礼申し上げます。